

県研究主題

学習指導要領の内容を踏まえた教育課程の編成と教育活動の工夫・改善

提案 1

提案者 平元 玄太郎（川崎地区）

<研究主題>

「キャリア在り方生き方教育」・地域との連携

1 提案内容

学校目標「子ども一人一人を大切にした豊かな人間性をはぐくむ教育」の具現化に向け、小学校学習指導要領解説総則編「家庭や地域との連携および学校相互の連携や交流」や川崎教育プランにある「キャリア在り方生き方教育」の柱の一つ「地域に愛着を持ち、よりよい社会をつくる担い手の育成」の趣旨を踏まえ、総合的な学習の時間の授業づくりに視点を当て、研究に取り組んだ。

(1) 地域の素材を生かした単元づくり

① 地域の素材を切り取る

歴史的に有名な地域の素材を生かした単元づくりを行うことで、児童の興味や関心を生かしながら、主体的な学びを引き出すことができると考えた。地域の素材を切り取るためには、教員が常に地域に対してアンテナを張っておくことが大切である。本校では教職員の地域研修を行っている。

② 各教科と関連させる

総合的な学習の時間の充実を図るために、社会科や図画工作科の学習内容と関連させた。例えば、社会科の「大陸から学んだ国づくり」の学習では、大仏建立といった題材と地域の寺を関連させた。その関連によって、地域の寺の歴史的価値に気付かせることができた。

③ 地域の人々と繰り返し関わる

「地域に住む人たちは知っているのか」「アンケート調査を行ってみよう」といった児童の疑問や思いを生かし、駅や商店街におけるアンケート調査を行った。このアンケート調査を通して、地域の人々との関わりを繰り返し行うことができ、「みんなに知ってもらいたい」といった新たな思いや願いにつながった。

④ 表現の場を確保する

表現の場があること自体が児童の学習活動への意欲を高めると考えた。実際には、PTA主催の「地域ふれあいまつり」などに参加し、調べたことを発表した。児童の思いを生かし、「ポスター」「映像」「ゆるキャラ」といった多様な表現方法を取り入れた。

(2) 外部講師との連携

児童の学習意欲を高める観点で、外部講師との連携を図った。

- ・住職…地域の歴史について ・地域在住のイラストレーター…キャラクターづくりのこつ
- ・市の生涯学習部文化財課…地域の文化財を守っていくことについて
- ・市のシティーセールス広報室…チラシやパンフレットの作り方について

① 連携の際に大切にしたいこと

ア 単元を通して、どの時期に、児童と外部講師とを出会わせるのかを吟味する。

イ 外部講師との事前の打ち合わせをしっかりと行う。

- ・学習の意図の説明 ・話してほしい内容の説明 等

ウ 学年内の打合せ及び準備をしっかりと行う。

- ・活動場所の確保 ・授業内容の検討 ・当日のタイムテーブル作成 等

2 協議内容

○計画及び実施の次年度へのつながりについて

- ・「表現の場の確保」と「地域の方や外部講師との出会い」という視点を引き継ぎながら、児童の実態に応じて、計画及び実践をしている。
- ・継続性と創造性とのバランスを大切にしていきたい。

○外部講師との出会わせ方について

- ・児童の「～したい」という思いの高まりを待ってから、出会わせるようにしている。

○学校全体としての地域との連携について

- ・学校の教育活動を支援して下さる組織があり、地域の人材を紹介してもらっている。

○表現スキルの系統性について

- ・全ての学年において、地域の「ひと、もの、こと」との直接体験と目的意識を持たせた表現活動を大切にしている。

3 まとめ

- (1) 地域へのアンケート調査数は200件を超えているということで、児童が主体的に学習に取り組んでいたことが分かる。またアンケート調査の結果から児童が地域の方々との考えの「ずれ」を実感し、自分たちには何ができるのかを考え、実践していったことは、市民性の育成につながることだと考える。
- (2) 中学校で生徒が自ら表現方法を選択できるように、小学校段階で多様な表現方法を経験させていく必要がある。
- (3) 学校として、地域素材を切り口にして教育活動を行っていくことは、大切な視点である。

提案2

提案者 林 信宏(県央地区)

〈研究主題〉

「児童の生きる力をはぐくむ教育環境づくり」

～学校教育目標実現の下支えとなる掲示物の工夫～

1 提案内容

学校の教育目標「自ら学び、自ら考える子」「お互い認め合う子」「心身共に元気な子」を目指し、児童の実態を考え、校内の掲示から学校の言語環境の充実を図り、教育活動の下支えとなる実践を行った。

(1) 研究の内容

① 掲示物の整理

これまでの掲示物の見直しを行い、整理をした。また、「校内掲示計画」を作成し、学年の実態、特別教室の位置などに合わせた掲示ができるようにした。

② 主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)の下支えとなる掲示

ア 話す・聞くレベル表の掲示

「話す・聞く」レベル表を各学年の発達段階に応じて作成し、全教室に掲示。

イ 階段を利用した多くの言語に触れる掲示

児童の目に触れる面に「百人一首」「四字熟語」「ことわざ」「英単語」を掲示。

ウ 「おすすめの本」の掲示

司書教諭と協力し、図書館の推薦図書の紹介の掲示も充実させた。

エ 月の学校行事の掲示

職員室前に児童が一目でわかる大きさを月ごとの学校行事を知らせる掲示。

③コミュニケーション能力の下支え

ア あいさつ通り

コミュニケーションの基本であるあいさつについて、これまで以上に意識できるようにした。

イ 英語の掲示

天気や体調、気持ちを問う英会話を中心にした掲示物の作成と掲示。

④心を豊かにする（新たな発見や気づきを引き出す）ための下支え

詩のコーナー、季節の掲示、朝会の話題、農園や自然のコーナーの掲示。

(2) 成果と課題

下支えとなるものは直接指導するものではないので、成果が目に見える形では表れにくいものである。しかし、「学校が明るくなった」「学校が楽しくなった」「新しいことを知ることができた」「会話が増えた」など児童向けアンケートでは高い数値が出ていた。教員側アンケートでも「児童が掲示物に関心をもつ」、「授業に役立った」という項目が高く、効果があったことが窺える。最初の一步としては役割を果たしていると考えられる。

今後は、授業に合わせ、掲示物を活用し、それを授業改善につなげていくことが必要とを感じる。また、掲示物をいかにマネジメントしていくか、誰がどのように継続的、計画的に行うかが課題となる。校務分掌に位置づけ学校全体で取り組むことで、教員一人ひとりが学校教育目標を達成するための具体的ビジョンをもって取り組むことができるようになるのではないかと考えられる。

2 協議内容

提案を受けて、「学校掲示」という教科等ではないが、児童に与える影響が大きい学習環境についての協議が行われた。

(1) 学校全体での取組にしていくためには

担当部署や研究組織等に関連して掲示の分担をしていく。学年別の色や教科やグループごとにマークで分別していくことで、より見やすく、誰もが関われるようになるのではないだろうか。システム化を図ることで、校内全体の共通意識もさらにもてるようになるだろう。

(2) 掲示物の内容について

小学校では発達段階を意識することは大事である。ルビをふるだけでなく、言葉そのものが児童がわかる言葉で掲示物を掲示する必要があるだろう。

3 まとめ

(1) 教育課程として

「学校掲示物」に目を向けられたが、日常的に見ているもの、目に入ってくるものとして教科等の学習ではないが、児童に入る情報としては非常に多いものがある。そして与える影響も大きいものである。「下支え」とは、その効果は見えにくいだが、じわりじわりと児童の力に

なっていくはずである。教科等の学習を支えるカリキュラムとして、隠れたカリキュラムも大事に考えてもらいたい。

(2) 学校組織として

今後、校内全体での取組になるよう、全職員での共通理解、校内研究の中で、チーム学校として掲示物のメンテナンスを行っていくことが学校組織力を上げていくことに繋がっていくと思われる。

グループ協議

協議の柱：『地域や学校の特色を踏まえた教育課程編成の工夫・改善』

1 主な意見

<地域との連携に関連して>

- 学校と地域の間で、決まっていることと決まっていないことを見極め、戦略的・計画的に連携を図る必要がある。
- 各学年との連絡・連携を密にし、地域学習等を進めていく必要がある。
- ゲストティーチャー、地域コーディネーター等地域の人と共に進める場合は、学校の教育活動の目的をしっかりと共通理解する必要がある。
- 交流を数年で終えるのではなく、継続していくための工夫をする必要がある。
- 地域ボランティアを募る手段として、メール配信による募集は効果的であった。
- 学校が求めていることをしっかりと地域に伝えていくことが大切である。

<学校環境の整備に関連して>

- 児童の教育環境を整備することで、児童が変容する。
- 教育課程の中で、学校環境の整備を位置付けていくことも大切である。
- 安全面での環境整備に関して、児童が主体的に関わっていくことで、自主的に決まりを守ろうとする気持ちが育っていく。
- 環境整備に関して、職員同士の話し合いの時間を確保し、共通理解しながら進めることで効果的になる。
- 環境整備により、学校の雰囲気、風土といったものが変わっていく。見通し、計画性をもって取り組むことが大切である。

2 まとめ

「カリキュラム・マネジメント」は、教職員が全員参加で、学校の特色を構築していく営みであり、校長のリーダーシップのもと、全ての教職員が参加することが重要である。

各学校が地域や社会の変化を受け止めながら、また、目の前の児童の実態をもとに、学校教育目標や学校として育成を目指す資質・能力を明確にし、その実現に向けて、全職員で取り組んでいく必要がある。次期学習指導要領改訂に向けて学校の教育課程をもう一度見直すには、今が絶好の機会である。